

## 金沢大学資料館所蔵考古学資料紹介(3)

### 伝ベツレヘム出土ランプ: 1

金沢大学資料館には考古学資料が保管され、現在も資料が増加している。そうした資料を研究及び教育に活用するため、資料館では収蔵目録を作成している。今回は西村コレクションを紹介する。

西村コレクションは、土器ランプ58点、土器68点、ガラス器21点(うち完形は10点)、青銅器3点の150点からなる。寄贈者の西村見暁氏は大正4年に石川県羽咋市に生まれ、昭和8年暁烏敏師の門に入り、昭和16年東京大学印度哲学科を卒業し、昭和27年金沢大学教育学部教育哲学講師として赴任。昭和37年金沢大学助教授を辞し、宗教活動に専念した。昭和37年エルサレムの骨董屋で、キリスト生誕の地ベツレヘムで出土したという土器、ガラス器、青銅器を一括購入した。ランプは1つ1ドルくらい。大型の土器は輸送途中で破損し、小型品が残った。昭和38年に帰国後、金沢大学教育学部に寄贈した。平成元年金沢大学資料館設立に伴い同館に収蔵された。

今回はローマ～ビザンツ時代のランプ29点を紹介し、次号でビザンツ～イスラム時代の29点を取り上げる予定である。実測図を掲載するものは、以下の資料館登録番号96JN・の後に1～12の実測図番号を付した。番号につづき、器形、素地色、化粧土、成形技術、長×幅×高(把手含)cm、注油口径cm、灯芯口径cm、煤跡、底部形状と底径、把手、文様、推定年代を記す。

96JN27 筒状のノズルをもつ円形の土器ランプ<sup>7</sup>°、オレンジ色素地、型づくり、(7.9)×5.7×3.1、注油口径2.2、ノズル先端欠損、平底:径3.1×2.6、肩部に放射状線文、ヘレニズム時代後期以降。ランプが型で作られはじめた時期であるヘレニズム時代後期に、この資料と同じ器形、同じ文様のランプがある[Kennedy 1963:71]。しかし、その素地は灰色から黒色が通常で[Kennedy 1963:71, Hayes 1980:No.61-63, McNicoll et.al.1992:Plate81-1]、オレンジ色素地の96JN27は後の時代の模倣品と考えられる。

96JN8(実測図1) 窪んだ円形部分(discus)に小さな注油孔をもつ土器ランプ<sup>7</sup>°、クリーム色素地、型づくり、(7.5)×7.2×2.7 注油口径0.4、灯芯口径1.0、煤跡、ノズル先端欠損、浅い輪高台状の二重圏線:径4.3、その内側にも二重圏線、ディスクにおそらく動物の浮文、ローマ時代。

96JN3 実測図1に似た土器ランプ<sup>7</sup>°、淡ピンク色素地、型づくり、(7.6)×6.6×2.7、ディスク中心に注油孔:径0.7、灯芯口径0.9、ノズル先端欠損、文様無、ローマ時代。

96JN6 実測図1のようにディスクをもつが、窪まずに平らである。クリーム色素地、赤化粧土、型づくり、

佐々木達夫<sup>\*1</sup>、在田則子<sup>\*2</sup>、波頭 桂<sup>\*3</sup>

10.1×7.8×2.3×注油口径0.7、灯芯口径1.1、煤跡、底部は損傷激しいがおそらく二重の浅い輪高台:径約4.3、把手欠損、文様無、ローマ時代。

96JN4(2) ディスクを割って注油口とした土器ランプ<sup>7</sup>°、ピンク黄色素地、型づくり、7.7×7.4×3.0、灯芯口径0.9、煤跡、輪高台状の二重圏線:径3.6、両側面に耳状の把手、ノズル部に渦文と小円文、ローマ時代。イスラエル出土のローマンランプはディスクを壊し注油口を拡大したものが多く[Sussman 1982:14, Israeli&Avida 1988:33]。イスラエルなど東方で独自のランプ製作が始まるのは3-4世紀で、それ以前にこのような現象(broken discus)が見られる[Israeli&Avida 1988:35]。両側面の耳状の把手は、紀元前後の古い形のローマンランプにも用いられる[Bailay 1914:No.616]。

96JN11(3) ディスクを割って注油口とした土器ランプ<sup>7</sup>°、ピンク色素地、赤化粧土、型づくり、7.6×6.4×2.6、灯芯口径1.4、煤跡、圏線を伴う浅い輪高台:径3.3、肩部に放射状曲線文、ノズル部に渦文、側面と底部に短線の刻文、下側面に孔有り、ローマ時代。これとよく似た資料が、1世紀末から2世紀初めあるいは2世紀と言われている[Hayes 1980:No.370, McNicoll et.al.1992:140]。

96JN12 実測図3に似た土器ランプ<sup>7</sup>°、オレンジ色素地、赤化粧土、型づくり、7.9×6.6×2.7、ディスクを割った注油口、灯芯口径1.3、煤跡、平底:径3.4、肩部に放射状線文、ローマ時代。

96JN5(4) 上面を割って注油口とした土器ランプ<sup>7</sup>°、淡ピンク色素地、成形技術不明、7.9×6.8×2.9、灯芯口径0.9×1.4、煤跡、とても浅い輪高台:径3.4、耳状突出小把手、文様無、ローマ時代?

96JN7(5) 円形の土器ランプ<sup>7</sup>°、灰色素地、赤化粧土、型づくり、7.9×6.5×3.3、注油口径2.0、灯芯口径1.2、平底:径4.1、後方に張り出した把手、肩部に連続二重円文、ローマ時代3世紀末-4世紀。このような器形のランプはJerashやPellaなどヨルダンの遺跡に見られる[McNicoll et.al.1992:pl.93-12]。

96JN15(6) ほぼ円形の本体とやや幅の広いノズルが、線で区切られている土器ランプ<sup>7</sup>°。ピンク色素地、型づくり、9.0×6.9×3.5、注油口径2.1、灯芯口径1.3、平底:径4.6、後方に張り出した把手、肩部に花文状の連続円弧文、ローマ～ビザンツ時代?

96JN19 実測図6と同様、本体とノズルが線で区切られる。ピンク黄色素地、型づくり、(8.2)×6.6×2.7、注油口径2.0、灯芯口径1.0、煤跡、平底、把手欠損、肩部に連続円弧文、ローマ～ビザンツ時代?

96JN17 実測図6と同様、本体とノズルが線で区切られる土器ランプ<sup>7</sup>、ピンク黄色素地、型づくり、8.6×6.5×3.5、注油口径1.9、灯芯口径1.2、煤跡、平底。後方に張り出した把手、注油口沿いに花文状に連続する円弧文、ローマ～ビザンツ時代?

96JN16(7) ほぼ円形の土器ランプ<sup>7</sup>、クリーム色素地、赤化粧土、型づくり、9.4×7.0×3.4、注油口径2.3、灯芯口径1.5、煤跡、とても浅い輪高台：径3.7、後方にやや反り返る把手、把手内部は空洞、把手表側に三本帯、肩部に連続山形文と小円および葉文か樹文、ローマ～ビザンツ時代?

96JN18 実測図7に似た土器ランプ<sup>7</sup>、クリーム色素地、ピンク化粧土、型づくり、9.7×6.9×3.5、注油口径1.9、灯芯口径1.2、煤跡、とても浅い輪高台：径3.5、四角錐把手、把手表側に二本の刻線、肩部に文様あるが損傷、ローマ～ビザンツ時代?

96JN14(8) 小さなノズルをもつ円形の土器ランプ<sup>7</sup>、淡ピンク色素地、赤褐色化粧土? 型づくり、7.3×5.5×2.3、注油口径2.7、灯芯口径1.0、煤跡、複数の圏線を伴う輪高台：径3.5、四角錐形小把手、肩部に葉文か樹文が並ぶ、ノズルとの境目に二本線に挟まれた網文、ノズルの下面にも二本線。イスラエルの Beit Nattifで製作された、イスラエル各地で出土するランプ[Sussman 1982:10, Israeli&Avida 1988:100,116]に見られる特徴は、この資料と一致する。Beit Nattifでは型や未使用のランプがコインとともに出土したことから、3世紀末か4世紀初めに工房が設立し5世紀まで続いたと言われる[Israeli&Avida 1988:116]。96JN14(8)はローマ後期～ビザンツ時代のBeit Nattif窯のランプであろう。

96JN20 実測図8に似るが注油口がより大きい土器ランプ<sup>7</sup>、オレンジ色素地、型づくり、8.2×6.1×3.1、注油口径3.3×2.7、灯芯口径1.4、煤跡、輪高台：径4.5、輪高台内に馬蹄形文、肩部に連続円弧文、ローマ後期～ビザンツ時代。3-4世紀以降のイスラエル製であろう。

96JN26(9) 幅広いノズルの洋梨形の土器ランプ<sup>7</sup>、ピンク黄色素地、赤化粧土、型づくり、7.9×5.2×3.1、注油口径2.4、ノズル上部灯芯口部分欠損、煤跡、輪高台径3.3×3.0、三角錐形小把手欠損、肩部に連続葉文、ノズルに十字形の厚みのある浮文。96JN14(8)と同様にローマ後期～ビザンツ時代の Beit Nattif窯のランプであろう。

96JN29(10) 卵形の大きめの土器ランプ<sup>7</sup>、淡ピンク色素地、型づくり、10.5×6.8×3.6、注油口径2.8、灯芯口径1.3、煤跡、輪高台：径3.0×2.6、肩部に放射状の線文。注油口と灯芯口の間V字形の線は、複数のV字を繋ぐように注油口と灯芯口を結ぶ直線を伴うこともあり、その形から燭台文candle stickまたは棕櫚枝文palm branchと呼ばれる[Kennedy 1963:83-85]。

ビザンツ時代。この種類のランプは、コインを伴ったエルサレムの墳墓出土品により、4世紀から6世紀の長期間を通じて確認されている[Kennedy1963:85]。5-6世紀のイスラエル中部と南部にとくに多い[Israeli &Avida 1988:145]。

96JN28(灰色素地、9.7×5.9×3.9,2.5,1.0)、96JN30(赤色素地、10.1×6.8×3.7,2.6,1.0)、96JN34(ピンク色素地、9.9×6.5×4.0,2.6,0.9)、96JN35(赤色素地、10.2×6.9×3.6,2.4,1.1)は、実測図10とほぼ同じ器形、法量、文様。ビザンツ時代。

96JN23(11) 卵形の小型の土器ランプ<sup>7</sup>、ピンク色素地、型づくり、7.7×5.3×3.0、注油口径2.2、灯芯口径0.8、煤跡、輪高台：径3.1、肩部に放射状線文、注油口と灯芯口の間十字架文、ビザンツ時代。実測図10の小型の種類である。エルサレムを中心に一般的で、エルサレム近郊のEin Yabrudの出土品が知られ、年代は4世紀末から5世紀とされる[Israeli&Avida 1988:146]。

96JN21(赤色素地、7.6×5.0×3.2,2.3,0.8)、96JN22(ピンク色素地、7.2×4.8×2.8,2.6,0.9)も実測図11とほぼ同じ器形、法量、文様。96JN31(淡ピンク色素地、7.9×5.4×3.7,2.3,1.1)、96JN32(淡ピンク色素地、8.2×5.5×3.5,2.6,0.9)も実測図11とほぼ同じ器形、法量で、文様は実測図10に似る。96JN25(赤色素地、6.8×5.0×2.7)は破損が激しいが、実測図11と同じ種類の薄手のランプであろう。

96JN33(12) 卵形の小型の土器ランプ<sup>7</sup>、赤色素地、型づくり、8.9×5.7×3.2、注油口径2.2、灯芯口径1.1、輪高台：径4.0、注油口沿いに連続円弧文、肩部に放射状線文、ノズル部に円文、ビザンツ時代。

参考文献

Bailey,D.M. 1988 A Catalogue of the Lamps in British Museum

Hayes,J.W. 1980 Ancient Lamps in the Royal Ontario Museum

Israeli,Y. & Avida,U. 1988 Oil-Lamps from Eretz Israel: The Louis and Carmen Warschaw Collection at the Israel Museum, Jersalem.

Kennedy,Ch.A. 1963 The Development of the Lamp in Palestine. Berytus 14:67-115

McNicol,A.W.et.al.1992 Pella in Jordan 2: The second interim report of the joint University of Sydney and Collage of Woodster Excavations at Pella 1982-1985

Sussman,V. 1982 Ornamented Jewish Oil-Lamps: from the destructions of the second temple through the Bar-Korkhda Revolt

Walters,H.B. 1914 Catalogue of the Greek and Roman Lamps in the British Museum (London)

1. 文学部 考古学
2. 資料館
3. 社会環境科学研究科 考古学

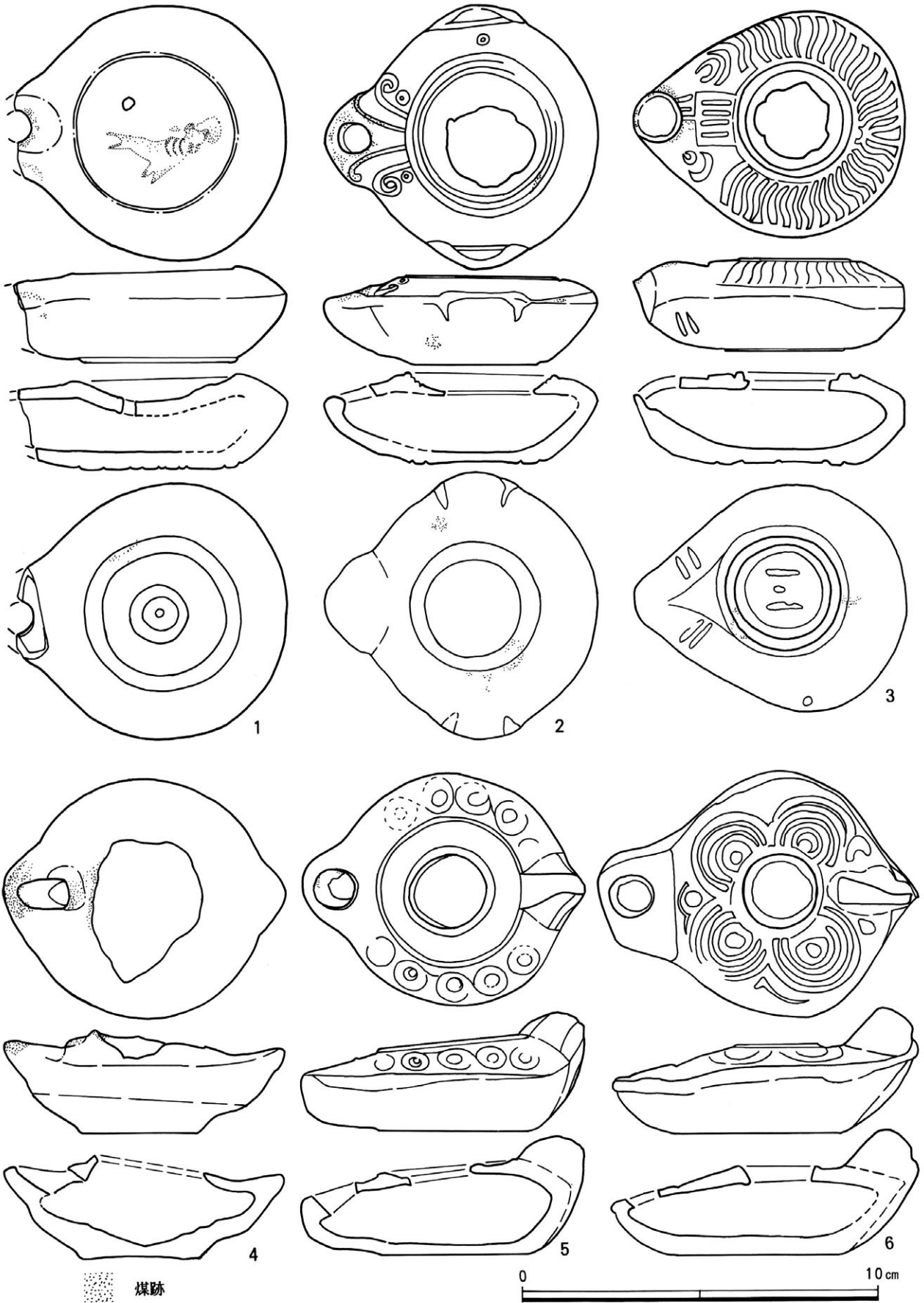


図1 伝ベツレヘム出土ランプ

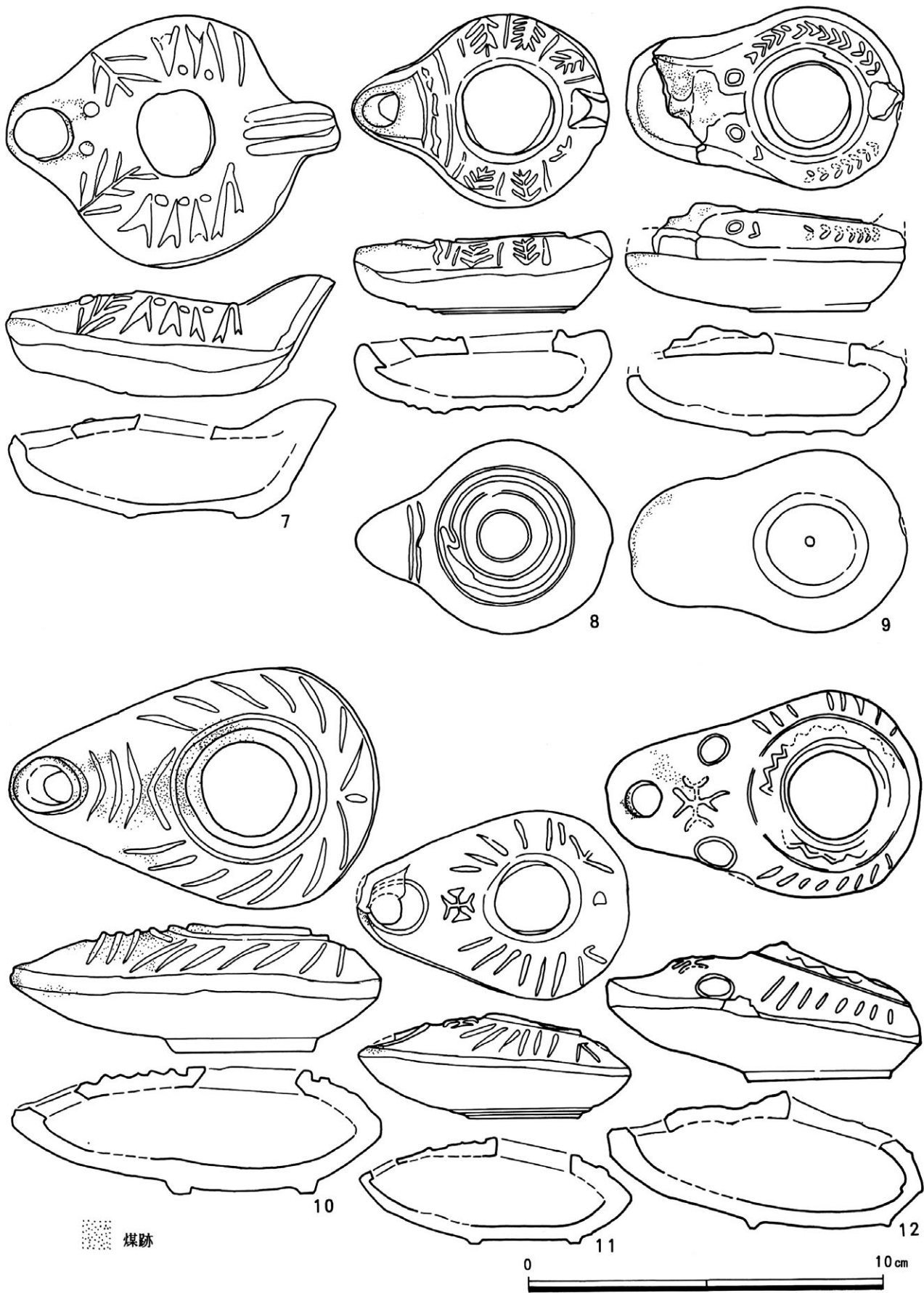


図2 伝ベツレヘム出土ランプ